

国語 (一般選考)

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 「みんなちがって、みんないい」

2019年10月の臨時国会・所信表明演説で、安倍総理が金子みすゞの詩を引用して、多様性を称揚した。多様性礼賛の象徴のようなこの言葉を安倍総理が引用するのは、2012年の政権発足以来、15回の施政方針・所信表明演説の中で初めてのことだった。

「みんなちがって、みんないい」

新しい時代の日本に求められるのは、多様性であります。みんなが横並び、画一的な社会システムの内り方を、根本から見直していく必要があります。

多様性を認め合い、全ての人がその個性を活かすことができる。そうした社会を創ることで、少子高齢化という大きなカベも、必ずやコクフクできるはず
です。

(第200回衆議院本会議・安倍首相所信表明演説)

平成の終わり、令和の始めに、総理大臣の重要演説でこの詩が引用されたことを、私はカンガイ深く受け止めた。私自身も、多様性を認め合う社会の実現を望み、カンガイしているからだ。

しかし同時に、私は「安易な多様性礼賛は危うい」とも言ってきた。多様性と共同性は、相性が悪い。なぜなら、多様化は世の中を細分化し、分断し、生きづらい人を増やす方向にも働きうるからだ。

多様化とは「みんなちがう」ということ。極端にいえば、異国人同士の集団のようなものだ。「みんないい」とその存在を認めるのはいいが、どうやって「共同・協働」するのかと言えば、簡単でないことは容易に想像がつく。

たとえば家族旅行。父はハワイに行きたい、母は温泉に行きたい、姉はデイズニールランドに行きたい、自分はどこにも行きたくない、とする。さて、「みんなちがって、みんないい」から導かれる結論は？ バラバラにそれぞれ行きたいところに行けばいい？ それでは共同性は成り立たない。多様性には自動的に共同性に至らない。むしろ、多様性は本来、共同性に反している。多様化とは、つながりにくい社会になることもある。

今、私たちが直面している課題の多くは、多様性のこ

の側面に由来するのではないかと私は感じている。若い人たちの多様性への身の処し方が、ある意味でそれを象徴している。たとえば今の大学生は、小さいころから繰り返し、「みんなちがって、みんないい」と聞いてきている。「違うことを批判してはいけない」「障害者を差別してはいけない」ことを、頭では十分理解している。「みんないい」んだから。存在は肯定的に認めないといけない。でも、じゃあつきあえるかと言うと、つきあえない。つきあわない。

存在は肯定的に認めるが、つきあえないので、共同性は生まれにくい。むしろ目につくのは「敬遠」と「遠慮」と「攻撃」だ。

まず「敬遠」は、たとえば「意識高い」という言葉の用法によく表れている。

「意識高い」とは、外国人留学生が増えた大学で、留学生と積極的に交流しようとする学生や、学外の人脈を積極的に広げよう、政治や社会の課題に積極的に向き合うとする学生を形容する言葉だ。

意識が高いのと低いのが、どちらが良いかと言えば、高いほうがいいに決まっている。ゆえに「意識高い」は、褒め言葉、敬う言葉だ。I 実際の用法は「うわっ、意識高っ」と使う。そこには、自分はずきあいたくない、というメッセージが込められている。「意識高い」は、他人を敬って遠ざけるために使われている。

「個性的」も同じ。多様性礼賛の中では、個性的であることは「良いこと」だ。しかし「あの人、個性的すぎる」と、自分はずきあいたくないという意思表示としても使う。「みんなちがって、みんないい(だけど A)」というのが「敬遠」だ。

II 「遠慮」。

誰かが何かで思い悩んでいるようなとき、そこに踏み込むかどうかの選択を前にして、「そつと」としてあげようよ」というように使う。遠くにいて、慮る。それは積極的なやさしさとしてもありえるが、消極的に使われることもある。「関わっても、どうせ背負いきれないから」だ。「違うんだから、どうせわかりあえないから」「かえって迷惑かもしれないから」だ。こうして、関わらないことが正当化される。「みんなちがって、みんないい(だ

けど **B**」というのが「遠慮」だ。

そして「攻撃」。

対面する場ではほとんど聞かず、主にネット上で展開されている。人数も、多くはないだろう。だが「みんなちがって、みんないい」という、上から与えられた「善いこと」のタテマエ感にうんざりしたときはけ口として活用されることがある。「みんなちがって、みんないい(だけ) **C**」というのが「攻撃」だ。

いずれの現象も、多様性に反しているのではなく、多様性が当然にもたらす結果だ。だって違うんだから。違うものときあうのは、同じものときあうのに比べて、めんどうなのだ。そのめんどうくさが、違うものばかりの中で同じものを探させ、集まらせ(細分化)、その居心地の良さの中に踏みとどまることで、違いを理解できないものにしていく(分断)。家庭の中から大学のキャンパス、社会と国家、そして国際政治まで、今起こっていることは、こういうことではないか、と私は考えている。繰り返しになるが、それは多様性からの逸脱ではなく、多様化がもたらす当然の帰結だ。

しかし、だからといって多様性そのものを否定するべきではない。現にある多様性を封じ込めて、純化させようとするのは、現実的ではない。移民の受け入れを止めたところで、多様性から解放されるわけではない。日本人同士でも、健常者同士でも、たとえ家族であっても、

人と人は、すでに、十分、多様だからだ。

それゆえ必要なことは、多様性をもつ細分化と分断の傾向と向き合いつつ、それを乗り越えるヨウソを多様性に加えることだ。言い換えれば、多様性がすばらしいものになるためには、多様性だけでは足りない。

何が足りないのか。インクルージョンが足りない。

インクルージョン(inclusion)は一般になじみのない英語だが、相当する日本語を探すと「配慮」^④という言葉に行き当たる、と私は考えている。その本質をもっともよく言い当てたのは、第一章で紹介した高校生だった。彼はこう言った。

歩くのがちょっとゆっくりな人とは、自分もゆっくり歩くじゃないですか。そういうことだと思っんです。

歩くのがゆっくりな人と一緒に歩くために、ちょっとゆっくり歩くこと。それがインクルージョン＝配慮だ。

多様性に配慮が加わって初めて、多様性の良い側面が開花する。

(湯浅誠『つながり続ける こども食堂』(2021年刊)より、一部改変した)

※1 第一章……本文には含まれていない出典の章番号

問一 ——部 a-j のカタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分は読みをひらながで書きなさい。

問二 ——部 ①「みんなちがって、みんないい」を言い換えた最も適当な四字熟語を、次のア-オから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 呉越同舟

イ 意気投合

ウ 有象無象

エ 十人十色

オ 一心同体

問三 ――部②「安易な多様性礼賛は危うい」と筆者が言うのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エから選んで記号で答えなさい。

- ア 多様性を認めることは他人からの敬遠・遠慮・攻撃を受け入れることだから。
- イ 多様性を認めることができる人は実際には意識の高い人に限られているから。
- ウ 多様性を認めることと多様性を受け入れられることとは違うから。
- エ 多様性を認め合うことは実際には不可能で分断を導くことにしかないから。

問四 ――部③「多様化とは、つながりにくい社会になることでもある」と筆者が言うのはなぜか。その原因を述べた四文字の言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 本文中の **I** **II** に入る最も適当な語を、次のア～カからそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- ア しかし
- イ それゆえ
- ウ 三つ目に
- エ 例えば
- オ 言い換えると
- カ 次に

問六 本文中の **A** **B** **C** に入る最も適当なものを、次のア～イから選んで記号で答えなさい。

- ア 自分は危ういと思う
- イ 自分は恐いと思う
- ウ 自分は関われません
- エ 自分は許さない
- オ 自分はずきあいたくありません

問七 ――部④「配慮」は、先に筆者が述べていた「遠慮」とどう違うのか。簡潔に説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

玄関のドアを開けたらおばあちゃんが待っていた。ただいまもいい終わらないうちに、ムラタさん泣かしたんだって、とおばあちゃんはいった。まだ靴も置く前、手も洗う前だ。わたしが学校から帰るよりも先におばあちゃんが知っていたということは、どこからどう伝わっているのかフシギだ。

泣かしてない、とわたしはいった。

「勝手に泣いたんだよ」

おばあちゃんは表情を変えず、

「また喧嘩したんだね」

「してない。あれは喧嘩じゃない」

わたしがいうと、無表情のまま短くためいきを吐いた。

おばあちゃんの無表情は一番怖い。

「なんでそんなことになったの」

わたしは口を開きかけて、あきらめた。説明するのはとても面倒だ。ムラタが悪かった。ムラタのまわりの男子たちも悪かった。でも、わたしもたしかに悪かった。どうしてそんなことになったのか、どんなにきちんと話したって、おばあちゃんにはわかってもらえないだろう。わたしにもわからないんだから。

「また、マグマか」

おばあちゃんはいった。うん、とうなずく。マグマだとしかいいようがない。わたしのお腹の中のマグマ。おばあちゃんは目を伏せて、いつもと同じことをいった。

②「あんまり目立たないようにね」

いつもこれだ。目立つな、という。目立とうと思ってるわけじゃないのに、目立つなといわれてもどうしたらいいかわからない。もしかしたら、おばあちゃんにも他にどういったらいいのかわからないのかもしれない。おばあちゃんがじつとこちらを見ているので、わかった、と答えて、手を洗いにいく。どうすればいいかはわからないけれど、おばあちゃんが目立たないでほしいと思っていることはわかった。その、わかった、だ。

おばあちゃんは目立つことをとても嫌がる。でもわたしは喧嘩——じゃなくて、よく揉め事を起こして、しかもたいてい相手を負かしてしまう。先生に叱られたり、友達からは仲間外れにされたり、けっこうな報いは受けきたと思うけれど、おばあちゃんに目立つなどいわれるとさらにそこに重し加わる。

「じゃあ、どうすればよかったの」

手を洗って、うがいをして、鏡の中の自分に聞いてみる。「黙っていればよかったんだよ。誰が何をやっ

わたしには関係ない。見なかったことにすればいいんだ」
③ そう答えながら、口がゆがんでいる。おえー、と声が出る。

利口でないのはわかっている。だけど、身体の中に火山があつて、それが噴火するのを止めることができない。みんなは止めることができるのか、それとも初めから噴火することがないのか。少なくとも、おばあちゃんにはないんだろうな、とわたしは思った。

下校のとき、靴箱のところでは顔が赤にしていた。クラスの男子がガウオンの靴を玄関から外へ向かって放り投げたのだ。ガウオンはブダンからあまり笑わないし喋らない。ふてぶてしい顔で悪いことばかりいうので、男子からも女子からも好かれていない。靴を投げられても、いつもなら平気そうだった。内履きのまま外へ靴を取りに行ってそこで履き替えて帰るだろう。でも今日は、様子が違った。何人かの子がその側を通り過ぎて、わたしもそうしようとして、気づいてしまった。ガウオンは泣くのを我慢して、怒りに満ちた声で何かをつぶやいていた。呪いの言葉みたいだったけれど、なんといつているのか聞き取れなかった。

「おーい、ガウオン」

離れたところで男子が数人野次を飛ばしていた。

「悔しかったら日本語でいい返してみろー」

そうしてゲハゲハ笑った。まんなかでふんぞり返って汚い歯を見せているのがムラタだった。

日本語で、というのが聞こえた瞬間にわたしは大腿で歩き出していた。植込みのところでは裏返しになってすりへった靴底を見せているガウオンの靴を片方ずつ拾い、まだ靴箱のところ立っているガウオンの足もとに戻した。それからすぐに取って返して、ムラタの手から靴を奪い、それを持っていつて校門のすぐ脇を流れている用水の上でひっくり返した。うわあ、と大きな声が出た。

「何すんだよ、ナルミ」

「あつ、ムラタのレアカード！」

追いかけてきた男子が用水に落ちた靴の中身を指さしている。

「おまえ頭おかしいだろ」

ムラタは怒鳴ったけど、ちよつとかすれて鼻声になっていた。やり返されたくらいで泣くなら初めからやらなければいい。

「弱い者いじめするんなら、ひとりでやんなよ」

わたしがいうと、ムラタは涙目でわたしを睨んでいた。

「やっぱおまえ、王の娘なんじゃないか」

「そんなことしかいえないの」

王の娘というのがムラタの考えつく最高の侮辱らしい。王の娘、王の娘、とムラタ以外の男子も嘸し立てた。王様がほんとうにいたなんて、たぶん誰も信じていないくせに。

少し離れたところで、きーちゃんとマコちゃんがめちやくちや気まずそうな顔で待っていた。わたしたちは、ガウオンのことも、ムラタのことも、もうふりかえらずに歩いた。ただそれだけの出来事が、学校から帰ってくるまでの間にもうおばあちゃんに伝わっている。

目立つなどということは、今いる場所に溶け込んで、そこからみ出すなどということだ。それなら、友達がいじめられていても、理不尽な差別が平然とされていても、黙って見過ごせということになる。

今は、マグマという言葉を知っている。でも、最初におばあちゃんに説明しようとしたときはまだ幼くて、どういえばわかってもらえるのかわからなくて、地団太を踏む思いだった。地団太という言葉だって最近覚えたのだ。地団太という言葉にあのときの気持ちを代弁してもらうことができて、ちよつとうれしい。

とにかくわたしは、みんなの身体の中にも火山があつて、マグマが噴き出すことがあつて、地団太があつて、それを踏み鳴らす足がある。そう思っていたのだ。でもどうやらおばあちゃんにはマグマが流れていないらしい。もちろん、地団太もない。身体の中で大砲がドカンと鳴るようなことも、たぶんいつさいないのだ。だから、どうしたつてわかつてもらえるはずがない。

居間に戻ると、まだおばあちゃんはいいたりないみたいだった。

「もうすぐ六年生でしょう。このままじゃよくないね。癩癩を起こしたとき、止める方法を考えないと。相手を泣かせたり、張り倒したりする以外の方法を」

おとなしく聞いておこうと思うけれど、癩癩とは違う⑤と思つた。もしこれが癩癩なら、癩癩も必要なものだということだ。それに——と思ひかけたけれど、自分でもうまくつかめなくて、考えるのをホリユウする。マグマには怒りとか憤りとかだけじゃなくて、もつと他の大事な成分も含まれている。だけど、それが何なのか、わたしにもよくわかつていない。

あと、わたしはムラタを張り倒してなんかいない。勝手に大げさに伝えられている。

「方法なんてないよ」

あるかもしれないけど、思いつかない。マグマはコントロールできるようなものじゃないから。

わたしが正直に答えたのに、おばあちゃんは首を振つた。

「そんなわけない。もつと賢い方法を考えるのがあなたの仕事」

それから、ほとんど同じくらしいの背丈になったわたしの顔を覗き込むようにして、つけたした。

「あんたはほんとうはものすごく賢い子なの。ちよつと立ち止まって、深呼吸して、力づくじゃなく、もつと賢く相手を打ち負かす効果的な方法を考えるほうが解決になるんだよ」

解決になる、という言葉に顔を上げる。いったい何をどうすれば解決になるのか、そもそもわたしは何を解決したいのか、ちゃんと考えたことがなかった。打ち負かす、という言葉にも、効果的な方法、という言葉にも、戸惑った。おばあちゃんはいつもの冷静な目でわたしを見ていたけれど、驚いているわたしがおかしかつたのか、ちよつと笑つて、そそくさと台所のほうへ行つてしまった。

だけど、無理だ。立ち止まつたつて別の方法は思いつかないだろう。黙っていたら、物事はぜんぜん好まないほうへ流れていく。噴火するマグマの勢いに任せて、その場でひとつずつ制圧していくしかないんだ。

好むか好まないか、正しいか間違っているか、絶対的な答えなんてないことをわたしはもう知っている。わたしの中の活火山が噴火するかどうか、それだけが判断基準だ。そんなふうに思っているわたしが賢い子なわけではない。世の中にはたくさん好き嫌いがあつて、たくさん正義がある。もちろんそうだ。明らかにひどいことが起きて、みんな我慢する。わたしは我慢して我慢して我慢し飽きた。いつまで我慢すればいいんだよ。深呼吸吸なんかしている間にマグマが治まつたらどうするんだ、と思つている。

「ごめんね、おばあちゃん」

台所で夕飯の支度を始めたおばあちゃんに、小さな声でいう。深呼吸をしたらマグマが治まるかもしれないとわたしも思うんだよ。そうやって治めることができれば、治まつたことだしまあいいかと思つちゃうんじゃないかな。目の前で起きた理不尽を見なかつたことにする。それを怖いと思つてるんだ。

それから、さつきおばあちゃんがいったことを頭の中でゆつくりと反芻する。

もつと賢く相手を打ち負かす効果的な方法。

おばあちゃん、それだよ、わたしが知りたいのは。

(宮下奈都「石を拾う」による)

問一 ――部 a i j のカタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分は読みをひらながで書きなさい。

問二 ――部 ①「あれは喧嘩じゃない」について「喧嘩」を「わたし」はどう言い換えているか。本文中の三文字以内の言葉で答えよ。

問三 ――部 ②「あんまり目立たないようにね」とおばあちゃんが言うのはなぜだと思われるか。その理由として最も適切なものを、次のア～エから選んで記号で答えなさい。

ア おばあちゃんは「わたし」が友達と喧嘩するなど目立った行動を繰り返すことで、「わたし」が先生や友達から見離されて孤立してしまうことを心配しているから。

イ おばあちゃんは「わたし」が喧嘩したムラタの家に謝りにいかなければならないことを気重に感じているから。

ウ おばあちゃんは「わたし」を賢い子だと思っているので、感情にまかせて目立った行動に出るのではない対処の仕方を「わたし」に見つけてほしいと思っているから。

エ おばあちゃんは「わたし」が感情にまかせて行動する傾向が強まっていくのを見て、「わたし」がこれからどんなことをしてしまうかを心配しているから。

問四 ――部 ③「そう答えながら、口がゆがんでいる。おえー、と声が出る。」についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選んで記号で答えなさい。

ア うがいをしたときに水でのどが詰まった状態を表現している。

イ おばあちゃんに思ってもいないことを答えて、自分で自分が嫌になっている。

ウ 自分で自分に答えながら、受け入れられないことを表現している。

エ 体の中の活火山が噴火するイメージを、ゆがんだ口と声で表現している。

問五 — 部④ 「ムラタの手から鞆を奪い、それを持って行って校門のすぐ脇を流れている用水の上でひっくり返した」について、なぜ「わたし」はそのようなことをしたのだと考えられるか。その理由として最も適当なものを、次のア～オから選んで記号で答えなさい。

ア ムラタたちが日本語が不自由で気の弱いガウオンにいやがらせをしているのが許せなかったから。

イ 「レアカード」は学校に持ってきてはいけないもので、ムラタが持っていることをばらそうと思ったから。

ウ 集団でいじめをしているムラタたちが「わたし」の好きなガウオンをターゲットにしたのが許せなかったから。

エ ガウオンが何かをつぶやいているのが「わたし」に仕返しをして欲しいと言っているように思えたから。

オ ガウオンの靴を放り投げ、日本語が不自由なガウオンを笑う非道ないじめが許せなかったから。

問六 — 部⑤ 「癩癩とは違う」と「わたし」が思っているのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のア～エから選んで記号で答えなさい。

ア 「わたし」の行動は単に制御困難な感情的行動とは違って、うまくは言えないが大事な理由があるから。

イ おばあちゃんは「わたし」がムラタを「泣かせた」「張り倒した」と誤って伝え聞いているから。

ウ 「わたし」の行動にはいじめを許さないという冷静な判断と客観的理由があり、やり過ぎたとは思っていないから。

エ 「わたし」には制御不能な突発的感情の動きがあつて考えなしに行動に移してしまう傾向があるが、それは病いのようなものだから。

問七 「わたし」が言う「マグマ」とは何だと考えられるか。簡潔に説明しなさい。

㊦ 次の①～⑤までの空欄に、――部の表現が下の「」の中の意味になるよう、漢字一字を入れて慣用的な表現を完成させなさい。

- ① 彼のやり方は「」にすえかねる。〔がまんすることができないこと〕
- ② 友人のために「」脱いで手伝った。〔他人のために本気で力を貸すこと〕
- ③ 新しい仕事に「」を広げる。〔仕事や行動の範囲を広げること〕
- ④ この失敗を「」に銘ずる。〔心に深く刻みこんで忘れないこと〕
- ⑤ 成功するまでに多くの辛「」をなめてきた。〔たいへんな苦しみを経験すること〕

㊧ 次の①～⑤の――部の表現を、より適切な敬語表現に直して書きなさい。

- ① お客様が来る
- ② 私が明日行く
- ③ 私はあなたのメールを読んだ
- ④ すぐにお送りください
- ⑤ あとで、あらためてご連絡いたします

㊨ 次の①～⑤までの空欄に、「」の中の意味になるよう、「」に漢字一字ずつを入れて四字熟語を完成しなさい。

- ① 因果「」〔行動の善悪にふさわしい結果が返ってくること〕
- ② 一刀「」〔あいまいな事をきっぱり解決すること〕
- ③ 以心「」〔言葉なしに伝えること〕
- ④ 一挙「」〔二つの事で二つの利益をえること〕
- ⑤ 紆余「」〔複雑な事情を経ること〕

一

問七	問五	問二	問一						
	I		f	a					
	II		問三	g	b				
		問六		A	問四	h	c		
	B		め			i	d		
	C			j	e				

※

二

問七	問五	問二	問一		
			f	a	
			問六	問三	つた
		g			
		問四	h	c	
			i	d	
				り	がる
				j	e

※

三

①
②
③
④
⑤

※

四

④	①	
		⑤
		③

※

五

①
②
③
④
⑤

※

受験 番号
氏名

※

解答例

受験番号

氏名

一

問七	問五	問二	問一		
<p>(例)遠慮は違いを認めながら関わろうとしないことだが、配慮は自分との違いを認めて相手に合わせて関わること。</p>	I	エ	f	a	
	ア		感慨	しようよう	
	II	問三	g	b	
	カ		ウ	歓迎	ほっそく
	問六			かくいつ	
	A	問四	h	c	
	オ		め	ほ	かくいつ
	B	めん	い	d	
	ウ		ど	い	d
	C	う	い	壁	
エ	う		い	壁	
			j	e	
			要素	克服	

□

二

問七	問五	問二	問一		
<p>(例)目の前で起きた理不尽を見過ごせせず許せないと感じる強い感情</p>	オ	揉め事	f	a	
			減った	不思議	
	問六	問三	g	b	
	ア		ウ	ぶじよく	息
	ウ	問四	h	c	
			保留	面倒	
			i	d	
			いきどおり	いや	がる
			j	e	
			したく	普段	

□

三

①	腹
②	肌
③	手
④	肝
⑤	酸

□

四

④	①
早急に	いらっしゃる
	②
⑤	③
後ほど	うかがいます
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧
	⑨
	⑩
	⑪
	⑫
	⑬
	⑭
	⑮
	⑯
	⑰
	⑱
	⑲
	⑳
	㉑
	㉒
	㉓
	㉔
	㉕
	㉖
	㉗
	㉘
	㉙
	㉚
	㉛
	㉜
	㉝
	㉞
	㉟
	㊱
	㊲
	㊳
	㊴
	㊵
	㊶
	㊷
	㊸
	㊹
	㊺
	㊻
	㊼
	㊽
	㊾
	㊿

□

五

①	応報
②	両断
③	伝心
④	両得
⑤	曲折

□